

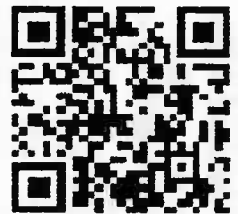
横浜市退職小学校長会



第70号

令和5年3月9日
横浜市退職小学校長会
会長 大久保 重則

ホームページアドレス



巻頭言

懐かしい子ども時代

会長 大久保 重則

今年の冬は寒波と大雪に見まわれ、停電や断水等の被害が各地で起こっている。自分の古里も異変が起こっている。

北海道函館市が生まれ故郷で

九十二歳の姉からの電話で、毎朝雪かきが大変だという。自分が育ち、横浜へ出て来て半世紀以上になるが、久しぶりの雪の便りである。私は七人兄弟の末っ子で、残っているのは電話の姉と二人きり。函館市(平成十六年市となる)になる前は「戸井村」であった。村全体で百件ばかりあり、お互い隣り同士はもちろん村全体が親せき同様であった。全ての家は屋号で呼んでいた。私の家の屋号は大久(だいきゅう)。小学校は複式学級で一つの教室に二学年一緒。先生は一人で一時間の授業は半分ず

つ。従って隣りの学年の授業も全て知っている状態。我が同級生は男女合わせて十一人。全校で七十人程の小学校だった。現在は統合されて母校は廃校。生活は自給自足で前は海、後ろは山と畑で食糧には困らないが難点は稲作ができないため米が不足で、戦後の食糧不足の時は姉や母親が米を手に入れるため、青森や秋田方面へ買い出しに出かける姿をよく目にした。当時のごはんは昆布やワカメの中に数つぶの米が入ったものだった。誰ひとりとして文句を言う者はいない。魚介類だけは豊富だったのが幸いであった。こんな生活の中で一番の楽しみは遊びである。冬は大雪。夜中に一度起きて道をつけないと歩けない状態。日が暮れても外

は雪の銀世界。その中で隠れんぼの遊びが楽しみで夜八時過ぎまで続ける。昼は小高い山からソリに乗ってすべってくる。夏は海へ潜ってウニ採り。これは、おこづかいかせぎの唯一の収入になった。そんな生活の中で今でも心残りが幾つかある。例えばある家の玄関口に雪をいっぱい積み、水をかける。次の朝、戸が開かないのを見て楽しんだ。メンコ遊びでけんかになり相手の家のガラスを九枚割ってしまった。習字の時間、男の子に顔にすみをつけられ相手の硯の中のすみを頭からひっかけ、先生に帰れと言われ帰ろうとしたら、「明日も悪いことするか」と聞かれ「明日になってみないけりゃ分らない」と返答したら先生は黙ってしまった。途中遊んでみんなが帰ると一緒に帰ったが、家に着くなり父親から有無を言わず大きい袋に入れられて天井から一晩中吊るされた。

私の大切な宝物「絆」きずな

平井 絢子

高校同期の仲間と月一回の勉強会?が三百五十回を越えた。コロナ禍に見舞われ、高齢でもあり、休会し三年になる。この間、幹事の案で「きずなメール」と称し、メールでの交流を続けることにした。仲間の姿は見えねど、「きずなメール」は、五十五号となっている。

日常生活や考えを伝え、互いに励まし合う場合は、「八十の壁」を越えた私にとって大切な宝物のひとつである。

俳句に親しむ

佐野つたえ



日々好日

佐藤 廣

介護相談員として十五年

齋藤 隆士

退職して数年後、介護相談員として区内の介護施設を訪問し、利用している方たちに接しながら、施設の経営者や役所とのパイプ役を務める機会を戴いた。教師だったことを忘れて、多くの方々と接し、施設での生活だけでなく、家族や人生のこと等々、初めて会う方たちと会話するのは初体験だった。

私の人生に、このような貴重な一頁を加えてくださった方々に深く感謝している。

退職してすぐ朝日カルチャーセンターの俳句講座を受講しました。その間、先生の主宰する結社に入会し、振り返れば今年で二十二年になります。現在は、月三回の句会に出て、句友の皆さんと自作の句を出し合っていて、いいと思う句を発表し合っています。長く俳句の道を辿ってきました。奥が深く思うようには進めませんが、止められないのは楽しいからかもしれません。

三十八回の放射線治療で完治し「早く治療を始めてよかったね。」と担当医に褒められ、今は安堵している。若い時、書や文字の大切さを教えられ、また「広く本を読み、大きな先生になりなさい。」と励ましてもらったことなどを思い出し、積ん読してあった書道教本を引っ張り出し、また、市施設の本を借りて読み、当時の教えを今になって時々実践している。八十路となつては、ゆっくりと楽しんでい